看護福祉学部
臨床福祉学科編

OB訪問

在学中に没頭したボランティア活動がきっかけで、
大学院修了後、3名の仲間とNPO法人を設立した大原さん。
現在は10の拠点を展開し、60名以上の職員とともに
“地域を創る”多彩な活動を行う若きリーダーを紹介します。

社会福祉法人 ゆうゆう 理事長
NPO法人 ノーマライゼーションセンター にょきにょき 理事長
大原 裕介さん（看護福祉学部医療福祉学科医療福祉専攻（現:臨床福祉学科）2003年卒業、大学院看護福祉学研究科臨床福祉・心理学専攻（現:臨床福祉学専攻）修士課程2005年修了）

ごちゃまぜの地域をつくる。

今回の訪問先は、JR石狩当別駅から徒歩圏内にある「共生型地域オープンサロン ガーデン」。大原さんが理事長を務めるNPO法人「ノーマライゼーションセンター にょきにょき」の拠点のひとつです。道道81号線沿いにあったのは、福祉施設のイメージを覆すようなログハウス調のモダンな建物。エントランスへ向かっていくと、エプロンとキャップを着用したスタッフの方があたたかい笑顔で迎えてくださいました。

「ガーデン」は、障がいのある方々がサービスを行うカフェです。大原さんがめざしたのは、障がいのある方々の就労支援だけではなく、障がいの有無や世代を超えた交流が生まれる「ごちゃまぜ」の地域をつくること。「私自身、学生時代に障がいのある方と接し、心にゆとりが生まれていくことを実感しました。そして、人のいいところに目を向けられるようになりました。違いのある人たちが尊重し合い一緒に暮らせる地域をつくることで、世界はもっと豊かになると思います」。

ボランティアからNPO設立へ。

大原さんを含む医療大の卒業生4名が当別町にNPO法人を設立したのは2005年。在学中から取り組んでいた学生ボランティアの活動拠点としてスタートしました。現在は当別町と江別市で10の拠点を運営。福祉専門職に加え、料理人、パティシエ、グラフィックデザイナーなど多彩な業種に及ぶ60名以上の職員が勤務しています。

「共生型地域オープンサロン ガーデン」では、コーヒーに加えドーナツや駄菓子も販売。子どもからお年寄りまでが集まってきます。接客はもちろん、ドーナツづくりも障がいのある方々の業務です。

拠点のひとつである「共生型地域福祉ターミナル みんなのうた」では、障害の有無や世代を超えた交流をめざし、子どもの就業体験や地域住民のボランティア活動のコーディネートを行っています。

活動理念は、「地域を創る」。あらゆる人があらゆる人に手を差し伸べるノーマルな地域をめざし、障がい者の自立支援、子育て支援、高齢者の共生型地域生活支援など幅広い事業を展開しています。また、本学の実習施設としても協力し、学生ボランティアの受け入れも随時行っています。

理事長としての主な業務内容は、福祉サービスの仕組み自体をつくることです。大切にしているのは、「誰がどのように困っていて、その人をどのように救いたいか」いうリアリティのあるストーリーを描くこと。そして、「その上で、地域のニーズを把握することが欠かせません」。ケアを必要とする人と地域の両方の視点から生み出される大原さんの活動は、当別町や江別市はもちろん、全国で多くの共感者を獲得しています。

「小さな街の活動が、世界を大きく変えるかもしれません」。そんな思いで、大原さんは福祉サービスの新しい仕組みをつくり続けています。

救いたい人が、いる限り。

現在、大原さんは本学非常勤講師として、看護福祉学部、薬学部での講義も担当。福祉の理念やボランティア意義を、後輩たちに伝えています。「高齢化が進むこれからの時代、どんな職業に就いたとしても福祉の視点が必要です。私の話を聞いて、“福祉って、思っていた以上におもしろいかも”と思ってもらいたいですね」。

また、全国でフォーラム活動を行いながら現場の声を政策提言にしていくNPO法人全国地域生活支援ネットワークの代表理事や、社会保障制度全般について審議・調査する厚生労働省社会保障審議会委員としても活動しています。

「今までの10年は、福祉制度が適用になる方を援助し、地域の方々に“大原さんのところに通う人たちはしあわせだ”と言っていただけるようになりました。しかし、現状に満足はしていません。これからの10年は、現行の制度では福祉サービスが適用されない問題にも取り組みます」。障がいのある方々が地域のなかで暮らせる環境がなかった10年前の当別町を変えた大原さんの新たな挑戦は、すでにはじまっています。

社会福祉法人「ゆうゆう」とNPO法人「ノーマライゼーションセンター にょきにょき」の各拠点で勤務する職員。大原さん（写真中央）を含め、この日に集まっていただいた7名は全員が本学臨床福祉学科の卒業生です。